

雲は変幻自在である。変幻自在の物を、形ある歌に閉じ籠めるといふ試みは無茶な事であろうか。歌は読み手の心により意味が如何様にも変わる。これも変幻自在であると言つて良からう。否、そのような変幻自在の歌を読みたいと思つているだけである。

● 灰色の雲塗りこめし空征くは黒鷲の群れ羽ばたきもせず。

鮎を狙つて多くのクロサギが酒匂川縁の高圧電線に並んでいる風景は珍しくない。だが、黒雲の中を羽ばたきもしないで飛ぶクロサギの群れには異様な怖れを感じた。

● 大山を踏み潰さんと入道雲夏惜しみつつ湧き立ちにけり。

今年は立派な入道雲を見る事が少なかった。管首相引退の報を聞きながら、今の政界には大入道が居なくなつたなど感じる。

● 富士の峯は冠頂き白雲の裳裾なびかせ秋を装う。

初冠雪が早かつた割に消えてしまうのも早かつた。富士はいつ見ても優雅である。

● 散り散りにちぎれ飛びゆく雲ありてやがて嵐の襲い来るやも。

首相候補者と言われる人たちが、廊下トンビの如くあちこちと訪問する様はちぎれ雲が風に吹かれる様に似ている。

● 金色に縁取りされし雲たちぬエーゲの海よ夏の朝焼け。

エーゲ海の船旅は、古代ギリシャの神話を思い、あるいは稀代の美女エリザベートをしのぶ旅であった。

● 我が友は恙きやとひと刷毛の漂う雲に問いてみるらむ。

プリンストンに住む友よ、元気で過ごしているか、疫下をどの様に過ごしているか、早く旅をできるような時代に戻りたいものだ。

● 雲間より月は昇りぬ冷えびえと光投げ掛く葉のなき桜。

すっかり葉を落とした桜の木は、裸で寒い冬を過ごさなければならぬ。次の春にはまた華やかな花を付けてくれよと願っている。